研究論文

ある校長経験者からみた 斎藤喜博の生涯にわたる実践と生き方

ー学校づくりと校長退職後の活動を中心にー

久保田　武[1]

はじめに

戦後、日本教育界に一大旋風を巻き起こした独創的教育者、斎藤喜博（1911～1981）が死んで今年は30年になる。筆者は、2008年に彼の主要文献リスト[1)]、2009年に島小時代[2)]、2010年に境東小と境小時代[3)]、2011年に公職退職後の活動[4)]を調べ、大学の紀要に発表してきた。今回は、そのまとめ、彼の生涯にわたる教育実践の足跡を、学校づくり（学校経営）と退職後の教育活動と生き方を中心に辿ることにする。

人間誰しも長所と短所があるが、彼の長所と短所は実にはっきりしている。だからこそ、協力者、支援者、さらには熱烈な心酔者、追随者、高く評価する人が多かったが、反対に反感や嫉妬心を抱き、批判だけでなく、中傷・デマ、さらには策を弄して失脚を図る動きも、特に在職中ほとんど絶えなかった。しかし総括すれば、斎藤が戦後教育界、特に学校現場に残した大きな遺産は、彼の長所が短所を完全に抑え込んだことを物語っている。これから彼の実践の跡を駆け足で辿り、今日の教育関係者が彼から学ぶべきことを提示したい。これがこの小論を書く目的である。

キーワード：斎藤喜博、玉村小学校、学校づくり、島小学校、境小学校、学校行脚、大学出講、第三日曜の会、授業学研究の会、著述活動

1．校長就任以前

（1）教師になるまで

斎藤喜博は、1911年3月20日、竹細工職人で気難しい父道蔵（1871～1949）と、働き者の母けむ（1874～1962）の4番目の子として、群馬県佐波郡芝根村川井（現在玉村町[5)]川井）に生まれた。川井は利根川と烏川の合流点に近い洪水常習地だったが、一方で桑畑が広がる養蚕地帯だった。今

1　日本教育大学院大学 学校教育研究科

日ではサイクリング道路を兼ねた堤防が玉村町を囲み、生家のすぐそばを流れる烏川の河原は、ゴルフ場に変貌、桑畑も野菜畑や水田に代わっている。近代的な工場も散在している。

６人兄弟中、長兄、次姉、喜博、弟の４人が教員になった斎藤家は、当時の日本農村では珍しく知的雰囲気が卓越した一家であった。恐らく絵描きで文筆家、そして読み書きの師匠だった祖父甚平（1833～78）―画号霞城（かじょう）―の血筋を引いたように思われる。

このような家庭環境を背景に育った斎藤は、1925年14歳で群馬師範本科第一部に入学、寮生活の傍ら暇さえあれば本を読み漁り[6]、彼の読書家としての基礎が固められた。

（２）青年教師と県教組文化部長時代―島小改革の前夜

①活躍の下地

1930年、19歳で群馬師範を卒業した斎藤は、教員だった次姉の勧めと視学をしていた遠戚のつてで、大正新教育で高名な宮川静一郎[7]が校長の玉村小学校に赴任することができた。若い教師時代は病身のため、欠勤、遅刻が多く[8]、内向的で教室に籠りがちだった彼が、島小校長就任後大活躍した下地は、師範時代に蓄積が始まった読書量の他に、①宮川校長との出会い、②最初に５年間持ち上がった女子クラスでの実践で培われた自信、③県教組文化部長時代の人脈形成に負うところが大きいと考える。

②最初の実践と成果

玉村小赴任３年目、成績上位から下位までの女生徒76名を一緒にした学級の担任[9]となった彼は、学習指導と学級経営に毎日遅くまで教室に残って創意工夫を積み重ね、休日も返上して児童全員の学力を大幅に向上させた[10]。３年後には高等女学校に８名も進学させている。この時期に先人の試行を参考に編み出した授業指導法[11]が島小での授業指導でも生かされている。しかし他方で、厳しい学習指導、叱責、と体罰で、「家でも遅くまで勉強し、学力はついたが怖かった、えこひいきがあった、授業中生徒に肩もみさせた、頭を押さえられた、チョークを授業中投げつけられた」などの回想[12]が当時の生徒たちの間にある。

③中堅教師として

精魂傾けた５年間の指導でこの子供たちを卒業させた後、次に担任した学級では、それまでより情熱は薄らいだようである。授業中自習させて原稿を書いたり、上半身裸になって日光浴をしたり、体罰も行い、男子の間では卒業式後殴る計画もあったそうである[13]。

その一方で、積極的に発言する教師に変身、学校運営のリーダー格になった。仲間で校内研究誌「草原」も発刊している。しかしその頃から軍国主義が学内にも押し寄せ、自由主義者、個人主義者、国賊などと校長や同僚から非難され、1943年失意の内に自分の母校である芝根小へ転勤した。しかし逆境に屈せず、時流に迎合せず、談話会や万葉集の輪読会を続けている[14]。

④歌人への道

ところで1945年５月、21歳から会員だったアララギ派の指導者土屋文明が川戸（現在群馬県東

吾妻町川戸）に疎開すると、彼の生活をなにくれと面倒見に訪れ、二人の関係は急速に接近した。翌 1946 年 6 月には、群馬アララギ派の句誌ケノクニが創刊された。以来斎藤は、群馬短歌界の指導者になり、多方面に人脈が広がった。

⑤敗戦から組合文化部長時代

斎藤は、敗戦後戦時中迎合した校長や教員が、反省・謝罪がないまま教員組合幹部になってストやデモを指導し、次いでレッドパージが始まると組合を脱退するという醜い姿勢を取ったことを厳しく批判[15]、常に時流に乗ろうとする俗人たちと新たな対立が始まった。1949 年県教組文化部長に選出されると、独創的な企画を次々に実行したが、組合幹部への批判は変わらなかった[16]。しかしこの時期に作られた人脈―県首脳部、中央の学者、文化人、新聞人等―が校長になったとき役立つことになる。

２．校長時代

（１）島小校長時代

①着任当時の島村と島小[17]

1952 年 4 月、児童数 364 名、職員数 15 名という小規模校、佐波郡島村島小学校の校長に赴任した。41 歳は異例の若さであり[18]、校長たちの風当たりは一層強まった。島村は、人口約 2400、戸数 400 余、利根川を挟んで南岸と北岸に分かれ[19]、渡し船は危険なので、南岸に本校（生徒数 235 名）、北岸に分校（生徒数 129 名）が設けられていた。式や運動会は別々だったので、事実上両校とも各学年単学級の独立校であった。自宅は玉村町の中心、例幣使街道[20]沿いの旧宿場町に近く、自転車で片道 1 時間半かけて通勤する羽目になった。

島村は明治以来蚕種で全国に知られ、多数の使用人を雇用する少数の富農層が、代々村政を担い、文化村[21]としても知られていた。しかし戦後の農地改革と民主化の影響で、斎藤の短歌仲間で社会党系の田島嘉之が村長に連続当選し、変化の兆しが見えていた。

着任当時の教師陣は、若い女教師 1 名以外に師範卒はおらず、6 名は斎藤より年長で万事消極的、父母の信頼は薄かった。子供たちも自信がなくおどおどしていた。一方赴任する校長は新任ばかり、1、2 年で学校を去った。これでは学校が良くなるわけがない。斎藤が腰を落ち着け、学校を良くしてもらいたいというのが、多くの父母の願いであった[22]。

②斎藤が打った手

このような学校に赴任した斎藤は、職場の民主化、事務の簡素化と能率化、形式主義、概念主義を排し実質主義でいく、他 2 項目を初年度の努力点と決め、まず教師と生徒に解放感と自信を与える手法をとった。即ち、村長には学校に予算執行権を認めさせて校長の権威を高め、教師の欠勤、遅刻、早退条件を緩和し[23]、会議後合唱、スポーツで気分転換と親睦を図った。また自分を校長先生ではなく「斎藤さん」と呼ばせている。次にできるだけ授業を見て回り、教師たちが集まってい

るところで授業の問題点を話し合い、結果を共有化して授業力向上を図った。その際玉村小時代の授業手法が活かされたのである。また赴任１年後に若い現職の金子緯一郎と赤坂里子、２年後に同じく武田常夫[24]を迎え、戦力アップが進んだ。

そのうえで、赴任４年目から合宿研究会を始めるとともに、毎年12月に（1回だけ11月）公開研究会[25]の開催が実現、学校活動の成果を全国の教育関係者、研究者、報道関係者その他に広く問うことにした。これでは教師は毎年決められた努力点に従って授業と生活指導の技を磨き続け、毎年進化せざるをえない。これには大変な努力の継続が必要になる。斎藤が去り、その後を追うように優れた実践者たちが去ると、島小教育はあっという間に消滅した。後任校長に斎藤のような資質と意欲を兼ね備えた人材はまずいないからである。

またこの厳しい体制についていけない、ついていこうとしない教師に対しては、企画会議から外したり、村民がいる前でも厳しく叱責し[26]、脱落する者も出た。斎藤着任当時島小在職教師14名中（斎藤を除く）、６年間で８名が学校を去っている（内１名は結婚退職）。

斎藤は、学者、文化人、マスコミなどの人脈をフル活用し、校内外での学校ＰＲと自分の権威付けに巧みに利用した。11年間で全国から約１万人の参観者を集めた島小の成果は、このように巧妙なＰＲ手法によるところが大きい[27]が、それだけではない。当時大半の学校が「ぬるま湯」の中で教師本位の実践をしていたのに対し、島小では、「斎藤天皇」という綽名が象徴するほど強いリーダーシップのもとで実践が進められていたのである。執拗な中傷、圧迫、追い出し運動には、多数の保護者、地域住民の力で撥ね退けている。１泊２日で島小を訪れた大江健三郎の手記[28]を読むと、教師と生徒の変貌ぶりがよく分かる。また学力がつかないという批判・中傷に対しては、1957年11月県教育研究所に依頼して国語と算数の学力テスト（田研式）を行い、国語は中都市並み算数は六大都市の標準を超える結果を得ている。

斎藤は父母、特に母親に対しても、父母参観日を通じて啓蒙し学校の理解者にした。その方策は巧妙で、年１回だった参観日を、消極的な教師の先入観を排して毎月実施し、内容構成も変え、終了後には教師同様、合唱やスポーツ、スクエアダンス等を織り込んで参加率を上げ、斎藤の応援部隊に育てあげた。母親たちは、斎藤の盾になったのである[29]。

さらに、県教組文化部長時代に企画した島村総合開発計画を、東大教育学部宮原誠一研究室と共同で1953年から３年計画で始めた。資金は島村と東大が折半、最も熱心に参加した青年層と一部婦人層に政治的分野でも改革思考が広まったが、他方村民の政治意識の対立が強まった。ちなみに、筆者は、村の小学校長は政治的中立の姿勢が必要だと考える。

③斎藤の手法への批判と異論

斎藤は自著の中で、着任早々村の内外で「島村は文化村ではない」と言ったと書いている。村のある古老は、この結果たちどころに斎藤に違和感を持つ人々を作りだしたと話している。よそ者の新任校長がこのようなことを公に言いふらすのは適切ではない。斎藤は、明治以来島村文化を築き、たびたびの大水害対策に骨身を削り今日の島村を作った村の旧家が果たした役割に、もっと謙虚に

敬意を払うべきであった。島小卒業生の田島弥太郎博士と橋本春雄博士が、1954年二人揃って日本学士院賞を受賞した快挙を筆頭に、博士が 30 人以上出現していることは、過去の文化の継承であり村民の誇りなのである。

また斎藤は、校長就任後も県教組の組合員に留まった。当時の日教組の指導部は、政治闘争重視を唱える勢力が強く、斎藤のように現場の授業実践を重視する姿勢を 20 坪の実践と軽蔑した。しかし斎藤は自分たちが選んだ組織が民主的に決めたことだから従うのが民主主義だという論理で、配下の教師たちが授業を放棄してたびたびストに参加することを認めている。しかし教師は組合員である前に公務員であることを、斎藤は無視している。

その他に、斎藤には女性問題の風評があった。数年前筆者は、島村教会の牧師から、彼が赴任した時、ある信者から斎藤を例にあげて女性問題に気をつけるよう忠告されたと聞いた。筆者は、証拠がない以上これは噂に過ぎず、反斎藤派に利用された側面があるように思う。しかし当時の女教師や母親たちの回想を読み[30]、また青年団の一員として島小に出入りしていた古老の話[31]を総合すると、誤解されても仕方がない接し方が斎藤にもあったようである。指導者としては脇が甘かったと言わざるをえない

④島小時代を終わるにあたって

高崎線の最寄駅岡部から徒歩で1時間以上かかる純農村にある小規模校、着任当時低学歴の地元出身者が多い教師集団、貧弱な施設設備、独創的な実践をするほど潰そう、追い出そうと画策する地元校長会、地教委、一部地元ボスという悪条件を克服して創り出した島小教育が、戦後日本の教育界に与えた衝撃は大きかった。島小を見て目か覚め，地元校の改革を始めた教師も多い。また大学人、文化人、マスコミ人たちがこぞって島小方式を世間に報道した。他方地元のボス、校長会、地教委には斎藤に根強い反感、嫉妬を抱く人々が多数存在した[32]。立場により若干理由が違うが、地元の校長たちにとっては、人脈、識見、指導力、実行力のいずれをとっても到底太刀打ちできない劣等感の裏返しがある。日本社会は、横並びと年功序列で和が保たれる。教員の世界は特にその傾向が強い。東京都杉並区立和田中学を民間人校長として改革した藤原和博は「企業なら争って他社のいいとこ取りをする。盗むことも厭わないのに学校は反対だ」と言っていたが、島小も和田中も遠方の学校から大勢学びに来る。文科省からも学びに来る。反対に近隣の校長の参観はない。嫉妬心が強く、近隣で目立ってもらいたくない心理が隠されているように思われる。

（2）境東小・境小時代

①たまたまの1年

1963年4月2日に境東小校長が急死し、斎藤は思いがけなく[33]島小から境東小校長へ移ることになった。11年続いた島小教育も終った。この学校も生徒数290名、職員数12名という小規模校であった。教員の多くは斎藤を尊敬していたし、斎藤も前校長の遺族が近くに住んでいることもあって、1年間は原則として方針を踏襲することとし、若い有能な教頭に日常の仕事は任せ、しばら

く 11 年の疲れが出た身を休ませた。島小で彼を支えた一番弟子の武田常夫は、斎藤にとって激務の後の良い休息になったと言っている[34]。

しかし思いがけなく、その翌年の 1964 年 4 月、彼は同じ境町の境小学校長に移り、以後 1969 年３月、58歳で定年退職するまでの５年間、公立小学校長として最後の務めを果たすことになった。

②赴任当時の境小[35]

当時の境町は、例幣使街道沿いの宿場町から発達した商業と繊維工業が盛んな町で活気があった。境小学校はその中心部に位置し、斎藤赴任当時の生徒数は 952 名、普通学級数 23、特殊学級数 2、職員 30 名からなる町一番の大規模校。児童は殆ど町の子供である。子供たちは始業式から騒がしく教師の話は拡声器を使っても徹底しなかった。授業中もざわざわした音が教室外まで聞こえてきた。数名の教師が宿直室でマージャンをやり、翌朝の授業に遅れる者までいた。そして校庭を含めて学校全体が汚かった。授業も創意工夫はおよそ見られず、教師集団としての方針もなかった。体育はドッチボールか野球、音楽は二部合唱もできず、夏のプール教室は、浮袋を使った水遊び、水泳指導はなかった。

③斎藤による境小教師団の矯正策[36]

斎藤の方針は、島小での学校づくりを繰り返すのではなく、島小で到達した段階からさらにその上を目指すとともに、大規模校ならではの教育実践を決意していた。そこでまず公開研究会をせず、外部の参観、取材を原則断った。もちろん少数の例外は認めたし、最後のころは体育祭、音楽会、卒業式などに数百名の参観者を入れている。この措置により、教師と生徒を落ち着かせ、保護者や地教委を安心させた。島小のように斎藤さんと呼ばせたり、勤務条件を緩めたりしていない。普通の学校と同じである。

最初の職員会議で斎藤が強調したことは、学校全体をもっと清潔な環境にする、全員で教授法や教材研究をする、始業時間になったらすぐ教室へ行き授業に集中する、校内でマージャンはしないなどである。また教室に入って授業を見て回った。こうして学校の雰囲気は変わっていった。音楽の授業をみて二部合唱、三部合唱の指導法を教え、体育の跳び箱指導では体育科の若い教師に範を示し、そして朝礼時の生徒指導でも指揮をする教師に手本を見せた。こうして１学期の終わりには、マイクなしで、約 1000 人の児童と教師の集会が成り立つようになった。また教師たちが厄介者扱いしたプールでも、赴任２年目から４年生以上は 25m以上の泳力を目標に指導し、県内水泳大会で最右翼の成績をあげるまでになった。このように子供たちは、教え方次第でできるようになることを、教師たちに身をもって示したのである。こうして多くの教師たちは心服し、子供たちは校長と教師を信頼するようになり、そして学校は変わった。

④保護者と生徒[37]

斎藤が境小校長に赴任してから３年間、境小ＰＴＡ会長、副会長をした須永久夫氏と大澤和世氏から筆者が聴き取りをした限り、保護者と斎藤の関係は、島小よりはるかに安定していたようである。その背景として、斎藤側には、経験・年齢の要素、外部からの参観と取材を厳しく制限し、子

供と教師の学校生活が落ち着いていたこと、学校生活全般の改善に手腕を振るったこと、島小の実践で成果をあげている事実の重み、女性問題の風聞がなかったことなど-------があげられよう。他方、保護者側の背景としては、①まず何よりも会長を中心とする幹部の強いリーダーシップによる校長支援体制、②商工業従事者が多く、東武伊勢崎線で東京に直結している町の人々は、世間が広く、自由で進取的な雰囲気の持ち主が多かった------があげられる。保護者の中には、合唱、表現、体育が重視されがちな学校生活に、危惧と不満を持つ人々も少なくなかったが、何よりも事業経営者の会長が、斎藤を教育者として尊敬していたので、少々の不満は説得して抑えこんだようである。

筆者はまた、男女 2 名の当時の在校生から話を聴いた。二人とも現在 50 代半ば、地元に住む有職者で境小 4 年から 6 年まで斎藤校長であった。まず異口同音に言ったことは、「学校ががらりと変わった。なかでも特に音楽と体育の印象が強烈で、ベートーベン作曲第九交響曲の『歓喜の歌』は、入学式、卒業式で歌ったし今でも歌うことができる。他の歌ともども今でも卒業生が集まるときに歌うことがある。」と話してくれた。ＰＴＡ副会長の家庭でも、住職のご主人はもっと学科を勉強させるべきだという考えであったが、羽仁もと子に賛同する副会長の妻は斎藤の方針に賛成し、夫婦間で議論もあった由。境小保護者の縮図をのぞき見た感がある。「1 学期は体操の会、水泳大会、2 学期は音楽会、サッカー大会、3 学期は卓球大会と毎月のように行事があって練習したこと、斎藤の全校集会での話なども印象に残っている」と話してくれた。

⑤境小の補足

斎藤が参観と取材を大幅に制限した効果は大きかった。これにより、50 代になっている彼の心身の負担を軽減し、余裕で生まれた時間を教師と児童の直接指導に多く割けるようになり、教育効果が高められた。もっとも斎藤は、いまや教育界のスーパースターであり、島小時代のように、自己ＰＲの必要性も願望もなくなっていたのである。

斎藤の赴任当時、境小の教師達は、島小と異なり、無資格教員（代用教員）がいなかった。その上 20 代は体育男子 2 名だけで、残りは全員 30 代以上であった。女性教師はそれぞれ世帯を持っていた。教師たちは経験とプライドがある代わり、柔軟性に乏しくなっていた。斎藤赴任後、マージャングループは、若い体育教師一人を除き皆境小を去っている。

このような背景を持つ教師団を教えながら 5 年間で学校を変えた斎藤の手腕は見事であった。教師達の回想と聴き取り[38]から明らかになったことは、彼らの意見に耳を傾け、強制せず、しかし斎藤に言われると納得して従わざるを得なくなるという斎藤と教師達の関係、これぞまさしく校長のリーダーシップの手本、校長として筆者はとても及ばないと知った。

ところで境小の改革で斎藤を助けたのが、島小以来の弟子武田常夫である。彼は、斎藤が書いたものを読み、直接話を聞いて心を動かされ、斎藤校長の 3 年目に島小へ異動、瞬く間に頭角を現し斎藤の片腕になった。斎藤が境東小へ移るとその翌年斎藤を追って同校に転勤したが境小へ移った斎藤と入れ替わりになってしまった。しかし 2 年後、恐らく斎藤の強い働きかけで境小に移ることができた。筆者は、境小元教師団の回想文と聴き取りから、武田の力量と人柄そして人望を知った。

斎藤が退職して２年後の 1971 年、武田は境小から、指導主事、教頭、小中校長の道を歩んだ。地教委が快く思わなかった斎藤の弟子としては異例である。残念ながらその武田は、校長在職中に病のため 1983 年退職、1986 年に没した。まだ 57 歳だった。著書に「真の授業者をめざして」国土社、「斎藤喜博抄」筑摩書房などがある。

３．校長退職後の斎藤喜博の活動 [39]

斎藤は 1969 年３月、58 歳で 境小を定年退職した。しかしその先は、東奔西走に明け暮れた 12 年だった。そして 1981 年７月 24 日夕刻、命を燃焼しつくしてこの世を去った。70 歳だった。これから引退後の彼の仕事を駆け足で辿ることにする。

（１）活動内容一覧 [40]

最初に晩年の仕事の全貌をまとめた表を示す。期間は 1969～1981 年（58～70 歳）。
次第に老境に入る第二の人生で、これだけの活動ができるかどうか自問自答しながら、斎藤の活動記録をご覧頂きたい。二つか三つできたら上々ではなかろうか

① 学校行脚：４回以上訪問校 11 校、原則１回限定訪問校 42 校
② 学校行脚を除く教育関係講演 58 回：教職員会、校長・教頭会、ＰＴＡ，地教委他
③ 大学出講：６校　1970～1979
④ 第三日曜の会：103 回　但し退職前（1967.11～1969.3）を含む
⑤ 教育科学研究会：10 回　教授学研究の会：15 回―どちらも全国規模の大会出席回数
⑥ 短歌ケノクニの仕事：32 回　定例歌会、吟行会、選歌など
⑦ 著述活動：単行書出版（含編著、共著）52 冊、雑誌・新聞などの寄稿文：約 200 篇

（２）学校行脚（複数回訪問校）

この小論で学校行脚とは、原則として学校の子供と教員を対象に、講演、座談会、授業見学、授業指導、研究会などのために学校訪問をした活動とする。

特に次に掲げる 11 校には、少くとも４回以上訪問し、授業を中心に繰り返し指導している。

学校名	訪問回数	指導日数	指導期間
① 兵庫県神戸市御影小学校	23	40	1967 ~1973
② 大阪府貝塚市貝塚東小学校	7	12	1971~1977
③ 広島県世羅町大田小学校	15	36	1971 ~1977
④ 北海道室蘭啓明高校（定）	12	36	1971~1977
⑤ 青森県十和田市三本木中学校	5	13	1973~1977
⑥ 石川県小松市東陵小学校	10	22	1975 ~1977

⑦ 青森県十和田市七百中学校	10	17	1976 ~1979
⑧ 兵庫県宝塚市逆瀬台小学校	13	27	1977~1981
⑨ 広島県呉市鍋小学校	7	22	1977~1980
⑩ 長崎県森山町森山東小学校	5	14	1977~1978
⑪ 兵庫県姫路市四郷小学校	4	10	1978 ~1980

指導内容は学校によって若干の違いはあるが、島小、境小とほぼ同じ。授業見学、授業指導、合唱、体育、表現活動（オペレッタ[41]など）、団体行動などであった。そしてその成果を公開研究会、音楽会などで全国に公開したのも、島小に準じている。この結果子供や教師が変わった。啓発された人々は、神戸市御影小学校の田村省三[42]、広島県世羅町大田小学校で見学した山内宣治[43]を始め多数輩出した。反対に、指導内容が合唱や体育に偏り学力が落ちるなどの批判や心配、校長の売名行為[44]だとする中傷などがあるのも、また斎藤を呼んだ校長が辞めると実践が終わるのも島小と類似している。しかし斎藤の指導で脱皮した教師たちが近隣校に分散し、全国各地に現れた結果、広い範囲で改革は進んだと推定できる。

なお、原則１回限りの学校行脚 42 校一覧は以下の通り。個々の内容説明は省略する。

1969:明石市鳥羽小、島根県木次中、岐阜県中津川一中、大阪府郡津小、香川県塩津町小中四校

1970:千葉県立国府台高校、埼玉県立川口工業高校、黒石市六郷小、浦和市西浦和小、枚方市牧野小、盛岡市厨川中、因島市田熊小

1971:帯広市小、盛岡市河南中、戸田市第二小、茨城県西郷小、旭川市大有小、三田市三輪小、因島市田熊小

1972:宝塚市第一小・長尾中、札幌市東白石中、三田市三輪小、名古屋市しまだ小、安芸市伊尾木小

1973 :鳥取県村岡小・鬼塚小、三田市三輪小、宝塚市売布小・宝塚中

1974 :北海道静内小・高静内小、宮城県松山中

1975:那覇市久茂地小

1976:東京正則高校

1977:岩手県向中野高校、神戸市志里池小・和田岬小・湊川高校

1979:愛知県中京女子大付属高校

（３）大学出講

最初に出講した６校の一覧表を提示してから、指導概要その他を説明する。

出講大学一覧表

	大学名	訪問回数	出講日数	出講期間
①	佐賀大学	6	13	1970～1973
②	岡山大学	3	9	1971・1978
③	宮城教育大学	33	67	1972～1977

④	和歌山大学	2	5	1973
⑤	大分大学	1	2	1976
⑥	都留文科大学	4	13	1977～1979

ここに掲げた大学での指導は、いずれも原則として教員志望の学生対象である。佐賀大学を例にとれば、講義、付属小[45]を使った体育・音楽の授業説明、学生模擬授業、斎藤の授業、学生合唱指導、付属小教員との話し合い、付属小で講演（学生参加）等からなる。1974 年８月から 75 年３月まで専任教授であった宮城教育大では、この他に授業分析センター運営委員会、研究会議、教授会、ゼミ、演習指導、第四土曜の会[46]等が加わっている。

退職後の斎藤を最初に講師に招聘した佐賀大学の副島羊吉郎教授は、付属小校長の経験から、付属、大学双方の教員養成授業に飽き足らず、斎藤を迎える案を教授会に提出したが、賛成を得るまで随分苦労している。教授たちは、如何に実績があっても師範学校が最終学歴の斎藤を講師に採用することすら難色を示した。現場の実績がなく、退屈な座学と付属校への実習丸投げの状況に反省はなかった。一方斎藤のカリキュラムは、当時としては画期的な内容であり、匠の技で指導を受けた学生たちの反応は上々であった。しかし副島が退職するとその後を引き受ける教員がおらず、斎藤の講師招聘は４年で打ち切られた。

一方宮城教育大学では、林竹二学長の不退転の決意とその意を受けた教授選考委員会主査横須賀薫助教授（当時）の努力によって、教授会で一度否決された斎藤教授招聘案が再可決され、1974 年８月から 75 年３月まで初代授業分析センター長の仕事をすることになった。

（４）第三日曜の会

この会は原則として１月と８月を除く毎月第三日曜日の午後斎藤の自宅で開かれた勉強会である。1967 年 11 月に始まり、1980 年 10 月に終った。開会累計 103 回。参加人数累計約 3380 名[47]。

実施年月	回数	参加人数	参加人数／回	実施年月	回数	参加人数	参加人数／回
1967.11~12	2	30	15	1974.2~12	9	325	36
1968.1~12	10	179	18	1975.2~12	9	345	38
1969,2~12	9	212	24	1976.2~11	9	326	36
1970.1~12	8	202	25	1977.2~11	7	270	39
1971.2~12	8	234	29	1978.4~11	7	265	38
1972.4~11	7	210	30	1979.2~7	6	195	33
1973.2~12	10	490	49	1980.5&10	2	97	49

勉強会参加は無料で、参加者が抱える教育現場または研究上の課題を報告し斎藤のアドバイスを受ける形で進行した。最後まで会の常連だった馬場信房（元都立小石川高校長、授業学研究の会会

員）は「斎藤の素早く簡潔な指摘は説得力があった。だからこそ大勢の人が、日曜日を返上し、手弁当で繰り返し斎藤の意見を求めたのだろう」と話している。岩手県の教師根田幸悦のように、土曜の夜盛岡を夜行寝台でたち、日曜の夜行寝台で翌朝盛岡に着き、そのまま学校へ出勤する熱心な常連もいた。

（５）教育科学研究会（教科研）と教授学研究の会

斎藤は、島小校長 2 年目に東大教育学部の宮原誠一、勝田守一、大田尭らと島村総合教育事業を契機に親しくなり、1955 年教科研の世話人になって学会活動を本格的に始めた。1965 年には教科研内に教授学部会が設けられ、公立学校を引退した 69 年以後夏の大会（69 年伊豆長岡温泉、70 年鳴子温泉、71 年渋温泉、72 年原鶴温泉）に参加している。また 70 年からは自分が編集の中心になって、毎年「教授学研究」[48] 国土社の発行を始めた。

ところで教科研教授学部会は、1973 年「教授学研究の会」へ移行し、斎藤が会の運営を一層強くリードするようになった [49]。この会では、大学人中心の研究者と学校現場の実践者の交流が全国規模で毎年行われ、機関紙「教授学研究」も引き続き毎年発行されている。退職後斎藤が残した成果に加えられよう。1973 年以後斎藤が参加した全国規模の太会は次の通りである。

1973.12:第 1 回合宿研 86 名参加―山梨県石和温泉

1974.4:研究会 60 名参加―大津市石山寺、74.8:夏の研究大会 5 百数十名参加―淡路島洲本、74.12:冬の合宿研 30 名参加―湯河原温泉

1975.4:春の合宿研 140 名参加―伊良子岬、75.8:夏の公開研大会―鳥取県皆生温泉、75.12:冬の宿泊研 150 名参加―目黒雅叙園

1976.4:研究者で研究会―目黒雅叙園、76.4:1 日研究会 140 名参加―正則学園、76.7:夏の公開研究大会 700 名参加―十和田蔦温泉　76.11:1 日研究会―正則学園、76.12:冬の合宿研―伊豆湯が島温泉

1977.2:1 日研究会 250 名参加―神戸、77.8 夏の研究大会―石川県片山津温泉 [50]、 77.12:冬の合宿研 150 名―伊豆湯が島温泉

1978.2:1 日研究会―神戸、78.8:夏の公開研究大会―北海道洞爺湖温泉、78.12:冬の合宿研―伊豆湯が島温泉

1979.6:1 日研究会―名古屋即武小

1980.8:夏の大会―長崎県雲仙温泉、80.12 :冬の合宿研―群馬県伊香保温泉‥‥‥最後の参加、岡芹忍が往復送迎した。

（６）短歌ケノクニの活動

公職引退以前から、群馬県アララギ派の歌会ケノクニの指導者だった斎藤は、新年の歌会、吟行会、定例歌会、選歌などで、退職後 12 年間に 32 回活動している。しかし、学校行脚や大学出講、健康悪化のため活動回数は徐々に減少、1980 年の 1 回が最後になった。

（７）著述活動

著書名は大学紀要に「研究ノート」として出す「文献目録改訂版」に譲るが、1969年以後の著述活動を概観すると、第一期斎藤喜博全集全18巻の編集と、それ以外の単行書（編共著を含む）34冊、計52冊の出版に関わった。この他に、月刊、季刊の教育誌、新聞などへの寄稿、序文や後記などを合わせると、単行書以外に約200篇の原稿を書いている。年譜にも、移動中の乗り物や宿泊先での待機時間などを使って原稿を書き、駅などで編集者に原稿を渡す記録がある。このように過密な時間の使い方[51]は、斎藤自身の寿命を縮めたに違いない。

ここで、斎藤の遺産を継承する活動が続いている事例を「附」として挿入しておく。

附：斎藤の遺産を継承する活動例-----公開研究発表会など（一莖書房「事実と創造」最近掲載分）

授業研究の会―西日本代表：宮坂義彦，副代表：白銀一彦（京都市）、授業研究の会―東日本事務局：斎藤征夫、佐藤栄太郎（昭島市）、西多摩授業の会、群馬・茨城・千葉授業研究会

最近の公開教育研究会開催―美濃市美濃保育園、青梅市友田小、同若草小、浜松市光明小、那覇市宇栄原小、秋田大付属小、別府大明星小、三田市すずかけ台小、稲沢市片原一色小、設楽町田峯小、多気町外城田小、群馬・茨城・千葉授業研究会

指導者―宮坂義彦、高橋金三郎、横須賀薫、大槻志津江、高橋元彦、川島環、白銀一彦、戸田淳、野村新他

４．今日、教育関係者が斎藤から学ぶこと

「校長が悪いとか、仲間が悪いとか、設備がないとか、学級定員が多すぎるとか、子どもが悪いとか、そうゆうことばを教師はいま禁句にする必要がある。」[52]

「もともと専門家の仕事は、列車の運転、外科手術のようにだれにでもすぐできるなどというものではない。ところが教師の仕事は、大学をでたばかりですぐ教壇に立っても、あるいはそれまで工場にいたり、主婦だったりしたものが教師になっても、一応の一般的教養さえあれば、何とかやっていけるような質のものだった。そして校長の場合もおなじである[53]」。

校長経験があるという理由で、現任校に招聘され「学校経営事例研究」の授業をすることになったとき、筆者の頭に浮かんだのは、斎藤のこの言葉である（一部短縮修正）。

斎藤の先任校長たちにとって、島小は通過駅だった。一方境小は大抵終着駅であった。

「今の教育界は、何もしないのがいちばん安全。前任の島小校長たちも、何もせず、誰の言うことでも聞いていたから私のような批判を受けなかった。そのかわり仕事もしなかったし、対決を応援する支持者もいなかった。-----」とは斎藤の言葉の要約[54]である。

斎藤赴任当時の島小・境小の状況とその後の変貌を知ったいま、今日の教育関係者が斎藤から学ぶことを筆者なりに示すと次の通りである。

①　校長なら授業を学校経営の大黒柱に据え、一般教師はまず授業のプロを目指すべきである。

② 校長は、斎藤が島小、境小で実践した学校経営手法と困難な課題に立ち向かった心を参考に、自分自身の適性と学校の実情に応じた学校経営を実践すべきである。配下の教師は、そのような校長とともにより良い学校づくりに労を惜しんではならない。

③ 校長は学校経営を、配下の教師は授業と生活指導の成果を、共に自己点検し、学校外に公開し、批判・助言を求める開かれた学校を目指さなければならない。

④ 教育委員会（私学なら理事会）や文科省は、自分たちの指導・助言に従順なだけの校長・教師を望ましい教育者と狭く考え規制しては、教育活動は矮小化する。斎藤を頂点とする行政に対してイエスマンではないが創意工夫と実践力に富んだ校長・教師を支援する懐の深さが必要。そうしないと教育は活性化しない。

⑤ 退職後は、斎藤のように在職中に培った技法を社会に還元する努力を持続することが望まれる。それを可能にするためには、現職時代斎藤のような抜きん出た活躍はしなくとも、向上心を失わず、日々仕事に打ち込まなければならない。筆者の私見では、その人の 40 代の生き方が 50 代を、50 代の生き方が 60 代を決める。

⑥ 斎藤にも短所があることを知る必要がある。彼の考え方や行動を無批判に正しいと思ってはいけない。自分の考えを周りの人との協調より優先する彼の強い生き方を猿真似すると、人間関係が必要以上にぎくしゃくする。また斎藤が退職後に示した超人的活動は、誰もが手本にできることではない。全国から要請が殺到したとはいえ彼は働き過ぎた感がある。標準的人間の晩年は、彼のように活動範囲を広げず、自分の力量に合わせて絞りこみ、時にはゆったりした気持でくつろぎ、できるだけ長く、社会貢献をする生き方が大切だと思うがいかがなものであろうか。

謝辞

この小論で、筆者がこれまで 5 回にわたって追いかけてきた斎藤喜博論は終わりになる。

この間、大勢の方々からさまざまな形でご教示、支援、励ましを頂いた。この場に主な方々のお名前を記して感謝の気持ちを表したい（お名前は順不同、敬称略）。

横須賀薫（十文字女子大学長）、斎藤草子（一莖書房）、馬場信房（元都立小石川高校長）、田村省三（元神戸市御影小教諭）、山内宣治（元広島県世羅町大田小校長）、坂元秋子（首都大学大学院生）、雲山文夫（岐阜県美濃市美濃保育園長）、増田翼（仁愛女子短期大学専任講師）、小出省司（群馬県病院管理者）、矢島正（群馬県立中等学校長）、新井正（境小校長）、栗原知彦・栗原寿郎・佐藤謙吉・田島健一・関口時人（以上島村関係者）、須永久夫（元境小 PTA 会長）、大澤和世（同副会長）、矢島正（群馬県立中等学校長）、岡芹忍・、大槻志津江・高橋元彦・青山園江・田中せつ・大橋武雄（以上元島小・境小教諭）、大澤亮湛・今井登紀子（以上境小卒業生）、有賀厚子（境町関係者）、野村新（元大分大学学長）、宮沢嘉夫（元明海大学教授）、蛭田政弘（文教大学教授）、篠原昭雄（元筑波大学教授）、相澤善雄（前都立国立高校教諭）、伊平保夫（元大妻女子大学教授）

注

1)　拙稿「斎藤喜博をめぐる文献リストの作成と主要文献解題」日本教育大学院大学紀要第 1 号 2008

2)　拙稿「ある校長経験者からみた斎藤喜博の校長像―その光と影」同上第 2 号 2009

3)　拙稿「ある校長経験者からみた島小以後の斎藤喜博の校長像―境東小学校と境小学校」同上第 3 号 2010

4)　拙稿「ある校長経験者からみた校長退職後の斎藤喜博の活動―学校行脚とその遺産を中心に」同上第 4 号 2011

5)　玉村町は人口 3 万 7 千（2010),面積 26 k m²，高崎、前橋、伊勢崎、藤岡、本庄（埼玉県）の各市に囲まれている。

6)　齊藤喜博全集第 12 巻「可能性に生きる」 P 98 に「私は図書館の本を全部読もうと計画をたてた。そして図書戸棚の右の上から、どんな本でもつぎつぎと読んでいった」とある。

7)　宮川静一郎（1890~1971）は、農家に生まれ 1911 年群馬師範卒業後県下甘楽郡岩平小学校首席訓導、1917 年群馬女子師範訓導になり大正自由教育思想に触れた。1920 年、29 歳で利根郡川場小校長に昇進、1923 年佐波郡剛志小校長、1926 年玉村小校長、1933 年富岡小兼高等家政女学校長、1942 年富岡町助役、戦後は富岡町初代公民館長として社会教育に尽くした。玉村小では奈良高等女子師範付属小主事木下竹次の「合科教育」を導入している。病弱だが仕事に打ち込む斎藤を庇った。斎藤も終生宮川を慕い尊敬していた。校長として人望厚く、独創的ではあるが自己主張を貫く斎藤とは対照的な学校経営をした人物であったように感じる。なお群馬県での大正自由教育思想の浸透と宮川静一郎校長の関わりについては、増田翼「斎藤喜博教育思想の研究」ミネルヴァ書房 2011 P78~111 に詳しい。

8)　前掲「可能性に生きる」 P 113~116 参照

9)　玉村小では、低学年で合科教育とともに能力別学級編成をしていた。斎藤は最初 2 学年、引き続き 3 学年の上位学級を担任した。4 学年になるとき能力別学級編成が終わり、学力差が大きい大人数の女子学級を担任することになった。

10)　前掲「可能性に生きる」 P 118~122 に詳しい。

11)　前掲「可能性に生きる」 P 141~144 参照。斎藤は、読み方教育の指導過程を①予備学習、②独自学習、③相互学習、④整理学習、⑤練習学習にわけていた。これは後に島小の授業形態で、「個人学習」、「組織学習」、「一斉学習」、「整理学習」の 4 段階に分けたもとになった。なお野瀬薫「戦前期における斎藤喜博教育実践の研究と大正教育の影響」教育学研究 1995.12 によれば、岡田刀水士（高崎中央小）、中沢宗弥（群馬師範付属小）などの学習法を参考にしている。

12)　坂元秋子「回想された斎藤喜博」首都大学教育心理学科教育学卒業論文 2005 参照。

13)　同上

14)　前掲「可能性に生きる」 P 153~213 参照。玉村小後半から敗戦までの芝根小時期の斎藤と周囲の動きが分かる。

15)　「狐面して又組合を抜けて行く戦争中全體主義の本を書きし輩が」斎藤喜博全集 15-2P104

16)　前掲「可能性に生きる」 P 266 会議はいつも 4 時か 5 時から始まった。1 時間ほど形式的な議論をすると「今日は夜までやらないと終わらないから晩飯にしましょう」という執行委員長の声がいつも出た。それから酒を取り晩飯を取って、7 時ころから形式的な会議が始まり 10 時頃終わりになる。------私は家へ帰れないから教育会館の宿直室に泊まったが、大部分は旅館に泊まったようだ。もちろん宿泊費、酒食費、夜勤手当とも県教組が出していた（一部短縮）。

17)　齊藤喜博全集第 11 巻「学校づくり」 P 31～51 参照。生徒と遊ばない先生や父母の声など当初の実態がわかる。

18)　県教育長、新聞社などが強く推し、県教員組合が推薦した結果、校長たちの反対を抑えて実現した（斎藤喜博全集　第 11 巻「学校づくりの記」 P 35~36）

19)　明治以後島村の中心部は利根川の中洲にあったが、1910 年の大洪水後、国県の援助で南北に集落が分れることになった。斎藤赴任後、1955 年に境町に合併されて境島村と改名、斎藤の追い出し運動が盛んになるきっかけにな

る。その後平成の大合併で、境町が伊勢崎市に合併され、島村は伊勢崎市境島村となっている。

20) 徳川家康の忌日に日光東照宮で行われる大祭に、毎年朝廷から派遣される例幣使が通る街道。中山道から倉賀野で分れ、玉村、五料、境-----を経て今市に至る。例幣（奉幣）としては繊維製品が供物の中心であった。

21) 明治初期の島村は、良質の蚕種産で全国に知られ、伊太利まで商談に行ったほどである。島小学校も明治 6 年にいち早く開設された。蚕種交易を通じてキリスト教に帰依する人々も現れ、明治 20 年田島善平宅内に教会堂が建築された。現在ある島村教会は明治 30 年栗原甚太郎が寄進した土地に建築されたもので、保育園が併設されている。教育もおのずから盛んになり文化村と呼ばれるようになった。「島村教会百年史」1997、「境町町史」3 巻 1997 参照。

22) 前掲「可能性に生きる」Ｐ333~334

23) 前掲「学校づくりの記」Ｐ103~106

24) 金子緯一郎：世良田小から転入、「島小 11 年史」を編集、斎藤が去る年教頭に昇格。
赤坂里子：境小から転入、島小教育のスターの一人として活躍。
武田常夫：境小から転入、斎藤の一番弟子として活躍、著書多数。

25) 島小公開研究会テーマ：第 1 回 1955 年「開放と創造」、第 2 回 56 年「教育技術の研究、第 3 回 57 年「島小教育の総合的検討、第 4 回 58 年「教育における技術と演出と創造について、第 5 回 59 年「授業の原則」、第 6 回 60 年「授業による教師と子どもの変革」、第 7 回 61 年「教育の可能性と限界性」、第 8 回 62 年「教材の解釈と展開」（「島小 11 年史」より）

26) 当時の青年団員で学校に出入りしていた栗原寿郎（島村教会用地を寄進した甚太郎の孫）の回想による。

27) 年度別参観者数は、1954: 21 ,1955: 174,1956: 151,1957: 338,1958: 489,1959: 763,1960: 2096, 1961: 2342,1962: 1871 合計 8243 名である。1952,53 年度の参観者数は含まれていない。名簿未記入の来校者も大勢おり参観者合計約Ｉ万人と推定されている。公開研究会参会者に限れば、61 年度の 651 名が最も多かった。なお第 6 回から公開研究会の参加者を制限している。
また 1953 年から 1964 年までの間に、大手新聞が島小を取り上げた回数を紹介すると、朝日 11、読売 7、毎日 4、産経 2、東京 1, 上毛 6 回である。その他では、日本教育新聞 8、週刊朝日 4、週刊読売 2 回であった。学者（太田堯他、芸術家（新藤兼人他）、作家（大江健三郎他）、小学館、岩波、ＮＨＫ, 第一映画社なども来校している。（「島小 11 年史」より）

28) 「最初にぼくが見たクラスは小学１年生で、その日お誕生日の２人の子供が他の子供たちにお祝いを受けていた。まずぼくは、その学校にはいったばかりの子供たちの、張りのある強い声，叫喚のような強い声に、胸ぐらをつかまえられるような気がした。子供たちの顔はみんな純粋な百姓の顔だ。-----(中略)-----その１年生の顔にみなぎるものの、なんと感動的だったことだろう。眼がキラキラしている。頬に集中力があふれている。----(中略)-----おそらくは、開放された顔、自分自身を解放してくれる場所と人をみつけている自分に信頼をもった顔ということができるだろう。」
2，3，4，5 年の授業参観の印象は省略して
「分校の 6 年生 20 人は女の先生の指導で、チエホフ作・神西清訳『カシタンか』という 30 ページほどの童話を読んでいる。すでにその時間の前までに、言葉の解釈とか文章の理解とかの段階は終わっている。そして、この段階までがぼくらの小学生のころの国語の授業だったのだが、島小学校での真の授業はそこから始まるのである。---（中略）ぼくが教室にはいっていった時、先生と子供たちは、ほぼ二行ほどの文章について話しあっていた。そしてその議論はその時間いっぱいと翌日の国語の時間いっぱいかかって、しかもなおすっかり解決したというのではなかった。-----後略」（大江健三郎「厳粛な綱渡り（下）未来につながる教室―群馬県島小学校」講談社文芸文庫より）

29) 前掲「学校づくりの記」 P 193~252 成長していく応援部隊
29) 坂元秋子「島小における斎藤喜博と教育観」 首都大学心理教育学科修士論文 2008 参照
30) 前掲栗原寿郎の回想
31) 前掲 26)に同じ
32) 前掲「可能性に生きる」 P 363~399、前掲全集 11 巻「島小物語」 P 456~473,に反斎藤運動が記述されている。また「可能性に生きる」のP 386~388 にかけて、「公立学校でありながら独立王国でもあった」と書いている。地教委が斎藤を苦々しく思う理由が分かる。
33) 前掲「島小物語」 P 614~621 に島小から境東小へ移る経緯が書かれている。
34) 前掲「可能性に生きる」P 404~425 に境東小の 1 年間が書かれている。何もしなかったわけでないことが分かる。
35) 前掲拙稿「ある校長経験者からみた島小以後の斎藤喜博の校長像」P32~34、前掲「可能性に生きる」 P 426^430 は斎藤の観察。
36) 前掲「可能性に生きる」 P 405~440 に斎藤の回想が、斎藤喜博編「教師が教師になるとき」国土社 1972 と,同編「授業は教師がつくる」一莖書房 1986 に教師の回想が、前掲拙稿「ある校長経験者からみた島小以後の斎藤喜博の校長像」に双方の回想をまとめたものが掲載されている。
37) 前掲拙稿　同上　P 39~40
38) 聴き取りは 2009 年 9 月 2 日に青山園江、大槻志津江、田中せつ、岡芹忍、大橋武夫、11 月 7 日に高橋元彦（いずれも元境小教師）に行った。
39) 前掲拙稿「ある校長経験者からみた校長退職後の斎藤喜博の活動」により詳しい説明が記載されている。
40) 表に記載されている「回数」他の数値は、斎藤の年譜から筆者が数えたもの。若干の誤りはありうる。
41) 齊藤が境小で創作した表現活動の一種。独唱、合唱、舞踊、演劇を組み合わせ、物語が進行する。表現を通じ自分を解放することで積極的にし、友達との交流を円滑にする狙いがある。なお団体行動は集会時の行進等を指す。
42) 田村省三は、「総合教育技術 1981.10.特集＝斎藤喜博―その人と仕事に学ぶ」の中で、「斎藤先生から学んだことは数限りない。恐らく教師としての私のすべてではないかと思うほどである。-------後略」と書いている。具体的な事例は、同誌、または前掲拙稿 39) P 10~11 に詳しい。
43) 山内宣治は、大田小第二回公開研究会を参観して感動、当時住んでいた三原市から 28ｋｍ内陸にある世羅町へ転居を決断し息子を太田小へ通わせる道を選んだ。自分はバイクで県立本郷工業高校へ通勤した。詳しくは、山内宣治「わたしの校長奮闘記」一莖書房 2000 P5~18、または前掲拙稿 39)P13 に詳しい。
44) 例えば前掲山内宣治「わたしの校長奮闘記」一莖書房 2000 P18~19 参照。但し非難の多くは地元中高教員と教育関係者が多かった。
45) 付属小中校での指導は、学校行脚校に含めていない。
46) 齊藤が宮城教育大に提案し実現した会。第 3 日曜の会をモデルに、大学スタッフ、学生、教師などの外来者が開く勉強会。横須賀薫助教授（当時）が世話人になった。
47) 年譜に毎回の参加者数が記録されているが、概数が表示されている部分もある。その場合は、筆者の判断で近似値に換算している。詳しくは前掲拙稿「校長退職後の斎藤喜博の活動」P 20^21 に原典の表記が記載されている。
48) 教育科学研究会教授学部会の研究報告として部会発足後 5 年目に発刊の運びになった。編集者は斎藤の他に、柴田義松（女子栄養大学）と稲垣忠彦（東京大学）である。内容は理論篇と実践篇から構成され、前者は大学の研究者が後者は学校現場の実践者が執筆している。しかし刊行の言葉は斎藤が書いており、彼が実質編集長と推察される。
49) 後半生の斎藤の活動をよく知る横須賀は、著書「斎藤喜博　人と仕事」の中で、歌会で選歌を決めるのは多数決ではなく歌会を主催する師である。ただしその選に説得力がなければ誰もついてこなくなるだけだと説明した後

で、「斎藤は公職を退いてから、教授学部会、教授学研究の会を組織するが、それはまさに短歌結社と歌会モデルの研究会だったのである。だから教育界では斎藤喜博はワンマンだとか、教授学研究の会は非民主的だということになっていたのである。」P47と書いているが、まさに的を射た分析である。

50) この大会が、斎藤と林竹二が別れる会になった。その経緯については、前掲拙著「―校長退職後の斎藤喜博」P22~23に筆者のまとめが、また横須賀薫「斎藤喜博 人と仕事」国土社1997　P147~165に横須賀の説明がある。

51) 斎藤としばしば酒食の機会を持った横須賀によれば、飲みだすと（もっぱらビール）殆ど食事を取らず、延々と自虐的に飲み続け、諌めても止めなかったという（前掲拙稿「－退職後の斎藤喜博」P25)。それほどストレスが大きかったのであろう。

52) 斎藤喜博全集第4巻「授業入門」P5

53) 斎藤喜博全集第7巻「私の教師論」P16

54) 前掲斎藤喜博全集第11巻「島小物語」P611~612

（2011年10月3日受稿、2011年12月21日受理）

Research Paper

An Overview of Lifelong Educational Activities of Saito Kihaku Especially Focused on his School Management Strategy and Life after Retirement from School Principal

Kubota, Takeshi

Saito Kihaku (1911~1981) was one of the most distinguished educator in Japan after the Second World War. He became principal of Shima Primary School at the age of 41. The school was located at a remote local village in Gunma Prefecture. Almost teachers there were not well-trained, for no teachers were graduated from teachers college except one, and preceding principals left the school mostly within one year. The children's parents complained of the poor ability and motivation of their teachers. However, Principal Saito drastically improved the mind and skills of teachers and the motivation and scholastic achievement of students during 1952~1963, when he was schoolmaster there. Thus, about ten thousand visitors came to his school to know the secret of his success and he became the most famous principal in Japan at that time.

The next school he made a great success was Sakai Primary School, which stood at the central part of a local commercial and industrial town in Gunma Prefecture and the teachers there were much more educated than those of Shima. However, the teachers were not trained as well, and their motivation and teaching skill were very poor. But here, Saito succeeded school change again during 1964~1969, and retired at the age of 58.

Then, he started amazingly energetic actions in various fields. His core activities was to help improve many schools, from primary to tertiary level by request of a number of institutions. So, he was called pilgrim educator. Secondly, he presided every third Sunday study meeting at his home. Thirdly, he became the leader of the Teaching Method Society, and fourthly, he wrote a great number of books and papers of education concerned. Fifthly, he was presided a Gunma branch of a big Japanese poetry society. For these activities, he travelled all over Japan, from Hokkaido to Okinawa. Accordingly, his schedule was so tight that he got ill by overwork and passed away at the age of seventy, leaving uncountable precious legacies to us.

Key words: Saito Kihaku, Shima and Sakai Primary Schools, Activities after Retirement, Pilgrim Educator